Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU

所属・職名　北里研究所東洋医学総合研究所・研究員
氏　　名　飯島 宏治（イイジマ コウジ）　生年月日　昭和38年1月13日

題　　目

自己免疫疾患に対する漢方方剤の影響
－免疫複合体除去能に対する作用－

研究内容

自己免疫疾患の病態形成における原因の一つとして、免疫複合体除去能の低下が考えられている。免疫複合体の局所への沈着は補体を介して炎症反応をもたらし、その結果、腎炎や血管炎を引き起こすと考えられている。このことから免疫複合体除去能を促進させることは、自己免疫疾患の病態の改善につながることが予想される。本研究では、免疫複合体除去能に着目し、自己免疫疾患モデルに対する漢方方剤の影響ついて検討を行なった。

1）GVHR モデルマウスに対する漢方方剤の影響

宿主に移植したＴリンパ球が、宿主の主要組織適合遺伝子複合体（MHC）の抗原性の違いにより生じる反応を、一般に移植片対宿主反応（GVHR）と呼んでいる。またマウスに親系マウスの脾臓細胞を投与することで惹起した GVHR モデルは、SLE などの全身性自己免疫疾患と類似した病態を示し、自己免疫疾患モデルとして有用である。この GVHR モデルマウスを用いて、種々の漢方方剤の影響について検討した結果、当帰芍薬散、帰脾湯、桂枝人参湯で、血中免疫複合体量の減少および脾臓重量の増加抑制作用が観察され、自己免疫疾患の病態改善に有効であると考えられた。

2）免疫複合体結合能に対する当帰芍薬散の影響

当帰芍薬散が、自己免疫疾患モデルである MRL マウスの免疫複合体除去能を促進し、また血中免疫複合量を減少させることを明らかとしてきた。さらに in vitro での免疫複合体結合能測定系による解析で、この作用は構成生薬中の当帰と蒼朮を同時に抽出することによって発現され、漢方方剤の同時煎出の重要性が明らかとされた。

3）ステロイド投与による免疫複合体除去能の低下と柴苓湯の影響

ステロイド剤は自己免疫疾患の治療に有効であるが、その免疫抑制作用により、免疫複合体除去能の低下が引き起こされる。ステロイドによって引き起こされた免疫複合体除去能の低下に対する漢方方剤の影響を検討した結果、柴苓湯を投与することにより免疫複合体除去能は促進した。このことから、ステロイドによる免疫複合体除去能の低下に対し、柴苓湯の併用が有効であると考えられた。

NII-Electronic Library Service